

コレクションの文言 6つの部屋

Dialogues with
the Collection

Participants in dialogues:
Takeuchi Katsutarō / Kato Kazuo, André Lhote,
Aoki Jun, Miyanaga Aiko,
Hiroi Nobuko, Takahashi Kohei

Kyoto City KYOCERA Museum of Art
1st Anniversary Exhibition
Dialogues with the Collection: 6 Rooms

本展のみどころ

幅広いスペシャリストの 眼がコレクションに 新たな光をあてる

本展では、詩人や文筆家として活動しながら当館の活動を支えた学芸職員、当館を改築し現在は館長も務める建築家、羊毛や絹などの異素材から作品をつくる繊維造形作家、版画制作を原点に映像作品を発表してきたアーティスト、ナフタリンや塩を用いて時間を可視化する現代美術家など、多様なひろがりを持つスペシャリストが実験的な展示空間を創造し、コレクションに新たな光を投げかけます。

建築家として、 館長として。 青木淳による 会場構成

青木淳は、本展にてコレクションと対話する作家のひとりとして、また会場構成デザイナーとして参加します。自ら改築を手がけたのちに館長を務める当美術館で、どのようにコレクションやその展示空間と対峙するのか、見どころのひとつです。

コレクションの 隠された魅力！ 初公開を含む 貴重な資料群

当館では、完成された作品ではない資料類も多く収蔵しています。例えば、糸などの素材や壁画の一部、日本画や織物の下絵などがありますが、それらは作品制作のプロセスや着想源を知るうえで非常に重要なものです。初公開となる資料も多く、見逃せないポイントです。

電車

- 地下鉄東西線「東山駅」から徒歩約8分
- 京阪電鉄「三条駅」から徒歩約16分

市バス

- 「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車すぐ
- 「岡崎公園 ロームシアター京都・みやこめっせ前」下車すぐ

Directions

By subway / Keihan Railway

- 8 minutes walk from Higashiyama Station of Kyoto city subway Tozai Line.
- 16 minutes walk from Sanjo Station of Keihan Railway.

By bus

- 1 minute walk from Okazaki Koen/Bijutsukan, Heian Jingu-mae.
- 1 minute walk from Okazaki Koen/ROHM Theatre Kyoto, Miyakomesse-mae.



令和3年度文化資源活用推進事業



関連プログラム

■ 開幕記念座談会 「コレクションとの共演、競演、饗宴」

出展作家をゲストに迎え、それぞれの視点から本展について語り合ってください。

登壇者： 青木淳、宮永愛子、ひろいのごこ、高橋耕平
モデレーター： 中谷至宏
<無観客にて収録。後日オンライン公開>

■ 対話シリーズ

全4回にわたり当館学芸員が聞き手となり、出展作家との「対話」を行います。

時間： 14:00～15:30(13:30受付開始)
会場： 講演室(本館地下1階)
参加費： 無料(予約不要、先着順、要当日観覧券)
定員： 各回40名

- 10月9日[土] 青木淳×中谷至宏
「素描を見つめて」
- 10月23日[土] ひろいのごこ×中山摩衣子
「山鹿清華旧蔵資料の調査について」
- 10月24日[日] 高橋耕平×長尾衣里子
「眠れるコレクションについて」
- 11月3日[水・祝] 宮永愛子×長尾衣里子
「つながりを読む」

■ ギャラリートーク

展示室で担当学芸員がツアー形式の解説を行います。

会場： 展示室(本館北回廊1階)
参加費： 無料(予約不要、先着順、要当日観覧券)
定員： 15名
日時： 10月16日[土]、11月13日[土]、
11月14日[日]、11月20日[土]、
11月21日[日]、11月27日[土]
各日14:00～15:00(13:30受付開始)

■ オンライン茶会「Voyage」

宮永愛子が席主となり、オンラインで茶会を開催します。

日時・定員未定、有料

*各プログラムへの申し込み方法や料金・購入方法など、詳細は当館ウェブサイトをご覧ください。*メンバーシップの予約優待あり。*新型コロナウイルス感染症の状況により、予定を変更することがあります。最新の情報は当館ウェブサイトにてご確認ください。

会場： 京都市京セラ美術館
〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町124
開館時間： 10:00-18:00(入場は閉館の30分前まで)
休館日： 月曜日(祝日の場合は開館)
観覧料(税込)： 一般 1,000円[800円]
大学・高校生 500円[400円]
中学生以下無料
※[]内は前売・20名以上の団体料金
※京都市内に在住・通学の高校生・高等専門学校生は無料
※障害者手帳等をご提示の方は本人及び介護者1名無料(確認できるものをご持参ください)

前売券発売中!
美術館公式オンラインチケット、チケットぴあ(Pコード:685-780)、ローソンチケット(Lコード:54293)ほか主要プレイガイドなど
お問い合わせ:TEL. 075-771-4334

<https://kyotocity-kyocera.museum>

京都市京セラ美術館開館1周年記念展

コレクションの文言 6つの部屋

Participants in dialogues:
Takeuchi Katsutarō / Kato Kazuo, André Lhote,
Aoki Jun, Miyanaga Aiko,
Hiroi Nobuko, Takahashi Kohei

Kyoto City KYOCERA Museum of Art
1st Anniversary Exhibition
Dialogues with the Collection: 6 Rooms

対話者

学芸職員・詩人
竹内勝太郎／加藤一雄
画家
アンドレ・ロート

建築家・当館館長
青木淳

現代美術家
宮永愛子

繊維造形作家
ひろいのごこ

現代美術家
高橋耕平

京都市京セラ美術館
Kyoto City KYOCERA Museum of Art

主催 | 京都市、読売テレビ
Organizer: City of Kyoto, Yomiuri Telecasting Corporation



当館は1933年に「大正記念京都美術館」として開館しました。地道な収集を重ねてきた所蔵品は現在約3800点を数え、特に近代日本画コレクションとしては国内有数の内容を誇り、洋画・工芸・版画についても名品が多く含まれます。

今回、開館1周年記念展のひとつとして、ジャンルや時代を超えたスペシャリストが異なるアプローチでコレクションと『対話』し、作品にまつわる秘められた歴史や物語を引き出す展覧会「コレクションとの対話」6つの部屋を開催します。6つの部屋では、現代美術家や建築家、かつて当館に在籍し草創期・転換期を支えた学芸職員、日本でのキュビズムの波及に影響を与えた画家といった面々がコレクションと『対話』し、当館の歴史や所蔵品からインスパイアされた新作制作を含む実験的な試みを展開します。コレクションの新たな魅力をぜひご覧ください。

This museum opened in 1933 as the Kyoto Enthronement Memorial Museum of Art. The collection now holds about 3,800 pieces, having one of the largest collections of Japanese painting domestically, and moreover, contains numerous masterpieces of Japanese Western-style paintings, craftworks, and prints. This time, celebrating the 1st anniversary of the Kyoto City KYOCERA Museum of Art, the *Dialogues with the Collection: 6 Rooms* exhibition will be held, bringing out the hidden history and stories behind the exhibited works by having “dialogues” between specialists of different genres and time, each approaching the collection in various ways. In the 6 rooms, contemporary artists, an architect, former curators of this museum who supported the initial and transitional stages of the museum, and an artist who influenced the uprising of Cubism in Japan, all will have “dialogues” with the collection, including an experimental attempt of exhibiting newly produced works inspired by the collection and the history of the museum. Please enjoy the newly fascinating appeal of the collection.

〈建築×日本画下絵〉

青木淳

建築家で当館館長の青木淳（1956）は、これまで多くの展覧会に参加し、作家として作品を発表する他、建築家として空間構成を手がけてきました。本展においては、所蔵品にある日本画の下絵を用いて展示空間を構成します。日本画における素描や下絵には、完成作に至るまでの発想や探求、揺り戻しや再構築といった経緯が凝集されており、青木はそこに建築図面との類似性を見出しました。展示空間を問い直し、日本画というジャンルに新たな視点をもたらす試みです。



上 | 青木淳によるファサドのためのコラージュ
右 | 竹内栖鳳《写生帖(鳥類写生)》1880-1881年、京都市美術館蔵

竹内勝太郎 加藤一雄

〈ことば×日本画〉

大正記念京都美術館の構想時から京都市の学芸職員として開館準備に携わった竹内勝太郎（1894）、1933）は、詩人、評論家としても活躍し、榎原紫峰ら多くの作家との人脈を持ち、開館時のコレクション形成に寄与しました。戦後、米軍接收解除による京都市美術館としての再開館に立ち会った加藤一雄（1905）、1980）は、美術史家、評論家として魅力あふれる文章を数多く残しています。作家との密接な関係から生まれた彼らのテキストが、所蔵作品に新たな視点を投げかけます。

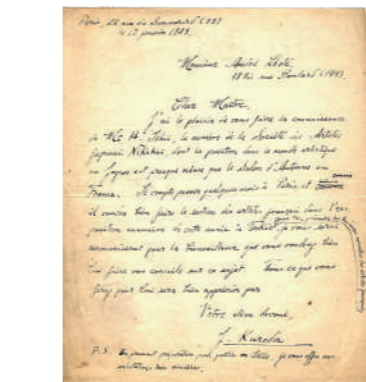
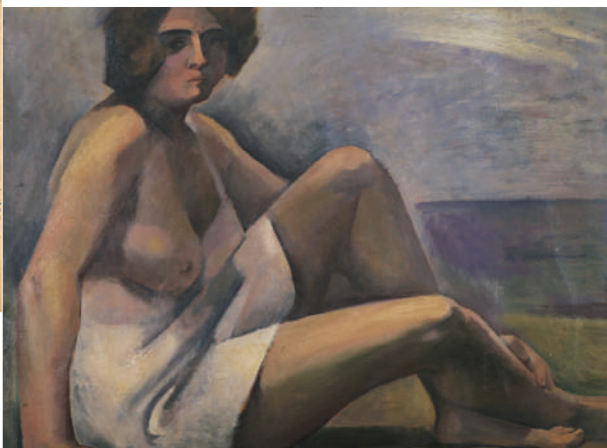


右（加藤一雄）ポर्टレート
左（竹内勝太郎）霧の冬 1936年、京都市美術館蔵

アンドレ・ロート

〈西洋×日本の洋画〉

アンドレ・ロート（1885-1962）はフランスで活躍したキュビストのひとりです。京都の洋画史に多大な足跡を残し、当館の洋画コレクションにおいても重要な位置を占める黒田重太郎（1887-1970）は、1920年代初頭にロートに師事し、様式化されたキュビズム絵画を描きました。手紙をはじめとする資料の紹介と両者の作品の展示を通して、同時代の美術としての西洋と日本の洋画について考察を促します。



上 | 黒田重太郎からアンドレ・ロートへの手紙（1923年1月18日付）、アンドレ・ロート・アーカイブ蔵
右 | 黒田重太郎《渚に座する女》1922年、京都市美術館蔵

宮永愛子

〈時間×工芸〉

日用品をナフタリンでかたどったオブジェや、陶器の貫入音や塩、葉脈を用いたインスタレーションなど、気配の痕跡を集めて時を視覚化する宮永愛子（1974）は、歴史ある京都の陶芸家の家系という自身の出自を辿り、過去の時間の新たな捉え方を提示します。宮永東山をはじめとした1900年代前半の京都の工芸に触れ、幼少期から馴染みのある京都市美術館の建築空間にも着目し、過去、現在、そして未来の時間を出合わせる場を創出します。



上 | 宮永愛子《みちかけの透き間 -時計-》2017年 写真：木奥恵三
© MIYANAGA Aiko, Courtesy of Mizuma Art Gallery
右 | (初代)宮永東山(印錦光山)《彩繪無文花瓶》1905年、京都市美術館蔵

〈映像×版画〉

高橋耕平

普段見過ごされがちな領域に着目し、特定の場・他者・史実との対話を試み、それらに潜む歴史や物語を視覚化した映像作品を展開する高橋耕平（1977）は、本展では自身の制作の出发点でもある現代版画に焦点を当てます。過去に自身が発表した「京都市美術館のコレクション」リストを音読する作品をアップデートし、新たにコレクションの文字情報に着目した映像も制作。音やイメージが連なり重なる様相を通して、コレクションの在り方について追求します。



上 | 高橋耕平作品の漂流 | 京都市美術館所蔵の作品について改修中の京都市美術館館内の展示風景（2018年、京都市美術館蔵）
写真：中野友樹 © TAKAHASHI KOHEI
右 | 木村秀樹《Fanci 2-3》1974年、京都市美術館蔵



〈テキスタイル×染織〉

ひろこのぶい

羊毛や絹などを中心に、紙や金属、貝殻など異素材を組み合わせ、織る・組む・縫うなどの技法によって作品を制作してきたひろこのぶ（1951）は、世界各地の染織技法や織物の調査を行うリサーチャーでもあります。本展では染織家・山鹿清華（1885-1981）が残した糸や古裂の調査をもとに、そのユニークな作品制作について紹介します。また、山鹿清華が所蔵していたシュニール糸を用いて織作品を制作。糸が結ぶ二人の染織作家の交流によって、唯一無二の展示空間が立ち上がります。



上 | ひろこのぶの「パルパルパル」による展示風景 | キャラリ・恵風 2018年
左 | 山鹿清華「手織錦屏風」立花 1935年、京都市美術館蔵

